

童話

水谷 年 惠

お猿の踊

お猿のどつさり居る山の中へ、一人のお爺さんがやつて来ました。お爺さんは重い箱を背負つて居ました。うんとこ、うんとこ山路を登つて來る中に、汗びつしよりになつて、すつかりくたびれてしまひました。

「やれ〜、此處らで一休みしようかな。」

と言つて背負つて來た重い箱を下して休みました。先づ汗を拭いて、其の次に箱の中の扇を一本出して、ぱらりと擴げました。其の扇は口の丸の着いた大きな扇でした。お爺さんは氣持よさそうに、はた〜とあふいで、

「あゝ涼しく涼しく。」

と言つて居ましたが、何時の間にか、こつくり〜と居眠を始めました。其の中にとろ〜寝込んでしまひました。

すると、あちらの樹の上や、こちらの樹の上に居たお猿が、そろりそろりと下りて來て、お爺さんの側へ寄つて來ました。尾音をたてないやうにして、ぞろ〜とやつて來ました。五匹、十匹、二十四匹、三十四匹、四十四匹、五十四匹、百匹、二百匹、三百匹と數へきれない程のお猿が、ぞろり〜近寄つて來ました。

一番前の大きなお猿が、そうとお爺さんの側の重い箱の蓋を開けました。中には扇が澤山澤山はいつて居ました。大きなお猿が、先づ一本取出す

と、あとのお猿も銘々一本づゝ取出しました。大きなお猿が自分の扇をばらり擴げると、外のお猿もばらりと擴げました。其の扇は、どれもこれも日の丸の着いた大きな扇でした。

大きなお猿が急いで樹にのぼると、外のお猿も急いで樹にのぼりました。大きなお猿が樹の枝に腰掛けて、はた／＼とあふぐと、外のお猿も樹の枝に腰掛けて、はた／＼とあふぎました。お猿達は皆大喜び、キツキツキツと聲をたて、扇をひら／＼させて面白がつて居ます。

あちらの樹の上でも、こちらの樹の上でも、日の丸の着いた大きな扇が、ひら／＼と動いて、お山の上には涼しい風がひつきりなしに吹きました。お爺さんはあまり涼しいので、眼を覺して、ハツクシヨンと一つ嚏をしました。側の箱を見ると、蓋が開いてゐて、中に在つた澤山の扇が一本も無くなつて居るので、びつくりしました。

大變だ／＼、扇が皆舞つてつた。扇が皆飛んでつた。

と言つて、くる／＼舞をして投しました。其の時、お猿達が樹の上で面白さうに、

扇は此處だよキツ／＼。

扇は樹の上キツ／＼。

と囃し立てました。ひよいと見上げたお爺さんは

二度びつくり、

これあ、まあーまあーまあー。

これあ、まあーまあーまあー。

とたまげてしまひました。

此處迄お出でよ、はた／＼。

此處迄お出でよ、ひら／＼。

と、あちらの樹の上でも、こちらの樹の上でも日

の丸の扇が踊つてゐます。

お爺さんはそれが面白くてたま なくなりました。

自分も日の丸の扇を持つて、

お猿も踊れよ、すててんてん。

扇の踊だ、すててんてん。

と踊り出しました。

樹の上のお猿達は、お爺さんの踊るのを見て、

又ぞろ／＼と樹の上から下りて來ました。そして

お爺さんの周りで、皆揃つて踊り出しました。

お猿も踊れよ、すててんてん。

扇の踊だ、すててんてん。

お爺さんの歌に合せて、

お猿も踊るよ、すててんてん。

扇の踊だ、すててんてん。

と踊りました。

狐の智慧

狐がライオンのお面を被つて、ウオー／＼とう

なつて來ました。それを見た兎が、びつくりして

目を廻してしまひました。羊はあまりこはくて、

動けなくなつてしまひました。馬は慄へ上つて逃

げ出し、牛はぐんにやり、地面へへたばつてしまひました。威張やの狼でも、ちびこまつて叢の中へもぐり込んでしまひました。

狐は、エヘン／＼と、二つ三つ咳拂をしてから、又ウオー／＼とうなつて行きましました。すると向ふの方から、本當のライオンが出て來ました。お面のライオンを見附けると、

「けちなライオンだな、一つからかつてやれ。」

と思つて、ウオーと、うなり聲を立てました。其

の恐しいうなり聲は山がうへ響き渡りました。狐

は縮み上つて、動けなくなつてしまひました。本

當のライオンは、のそり／＼と近寄つて來て、

「こいつ、怪しいぞ、其處を動くな。」

と言つて、にらみ附けました。狐はしつぽを見せないやうにして、

「世界一のライオン様、獸は皆あなたをこはがつて居ります。私はあなたに、澤山の御馳走を差

上げませう。」

と言ひました。

ライオン「何處に在る、早く案内しろ。」

狐「只今案内致します。けれどもあなたのやうな世

界一のライオン様に尻尾を向けては罰があたり

ますから、私はお後から参りませう。」

ライオン「うん、よし／＼。どう行くのだ。」

狐「此の道をどこ迄もお出下さい。すると、世界一

のライオン様をこわがつて兎が目を廻して居り

ます。羊が動けなくなつて居ます。牛がへたば

つて居ます。それから馬も狼もうろ／＼して居

ます。」

ライオン「それは御馳走ぢや、どりや行かう。けちな

ライオンお伴をせい。」

狐「はい／＼。」

本當のライオンはそれこそ大威張で、どしんど

しんと歩いて行きました。行つても行つても目を

廻した兎は居りません。動けなくなつた羊も見附かりません。馬も居なければ牛も居りません。勿論狼の姿も見えません。何處へ逃げて行つたものか、まるで影も形もありません。本當のライオンはすつかり腹を立て、

ライオン「こらつ、御馳走は何處だ。」

とどなりました。もう其の時には狐は自分の穴の

底へもぐり込んで、ちびこまつて居りました。何

時の間に狐が逃出したかライオンは知りませんでした。ライオンは

「おのれだましたな。狐のやつに違ひない」

と言ひながら、其の道を引返して狐を捜しました。

路端にライオンのお面が捨て、ありました。狐は見附かりません。

「今に見ろ、狐のやつめ、見附けたらひどい目に

遭はしてやるぞ。」

と言つて本當のライオンは、ライオンのお面をめ

ちや／＼に踏破つてしまひました。それからと言

ふもの、狐はライオンがこはくて／＼、決して穴

の底から首を出す事が出来ませんでした。